

# 強度行動障害実践事例報告

---

## こだわり 1

### 本人の状況

最重度精神発達遅滞、自閉傾向

コミュニケーション：一語程度の言葉あり。簡単な言葉かけは理解できている様子が見られるが、写真カード等視覚的に示した方が理解しやすい。

特性・特徴的な行動：日課の急な変更やイレギュラーなことに弱く、パニックが見られる。パニックになると自分の額を激しく叩く。

日中活動では、数種類の自立課題（以下「課題」という）を 1 セットとし、休憩を挟んで全 2 セットを行う。休憩中に、完成させた 1 セット目の課題を支援者が解体し、1 セット目と 2 セット目は同じ課題を提供している。

### 問題とされた行動

日中活動場面で混乱すると、課題を完成させては元の状態に解体するこだわりを繰り返す（以下この行動を「ループ」という）。こだわりが強いときには、制止や促しがきかず日中活動が終了できなくなる。

### 取り組み経過

#### ・データ収集

日中活動時の様子を記録に取り、問題とされた行動が見られた場合には、そのときの状況、支援者の対応とその結果を詳細に記録した。

日中活動以外の日課との関連性について、日々の記録により確認した。また、関係者からの聴き取りにより、行動の原因をさぐった。

#### ・状況の分析

##### 【記録等から確認できたこと】

記録から下記の傾向が見られることが分かった。

- ・特定の課題をきっかけにループに入る。
- ・1 セット目はスムーズに課題に取り組めるが、2 セット目にループに入ることが多い。
- ・当日あるいは前日に、日課の変更（日中活動の有無等）やイレギュラーな日課の追加があった際に、ループに入ることがある。

生活支援職員等からの聴き取りにより、「以前、余暇時間に行う活動として日中活動と同じ形で自立課題を提供していたが、その際に、「完成」「解体」までを一連の流れとして本人に取り組んでもらっていた」という情報があり、ループは意図せず学習した行動である可能性が考えられた。

##### 【行動に至る要因の分析】

状況を（図 1）のように整理し、ループに至る要因として以下のように仮説を立てた。

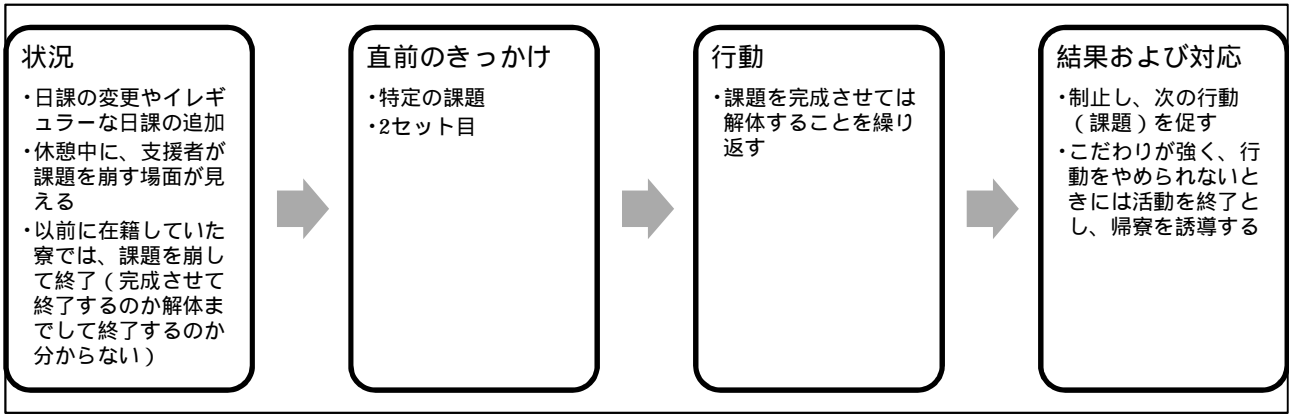


図1 ループに至る状況（仮説）

日課の変更等があり、不安を抱え精神的に不安定な状況で日中活動に参加する。休憩時に支援者が課題を解体している場面を目にして混乱が強まり、特定の課題をきっかけに以前経験した「課題を解体して終了する」ことを思い出し、ループに入る。

・対応策

仮説に基づき、「状況」及び「直前のきっかけ」に対する手立てを考えることとした。

まずは、生活支援員と情報を共有し、日中活動の有無を視覚的に伝えることを徹底して行ってもらうよう確認した。

日中活動場面では、ワークシステムを変更し、休憩時に課題を崩す場面を見なくてもすむように、1セット目と2セット目では異なる課題を提供する方法をとることとした。また、生活の場で取り組む余暇との区別をつけるために課題を入れるケースを変更し、これまで取り組んでいた課題をすべて新しくした。

・取組結果

行動の変化は（図2）のとおり。

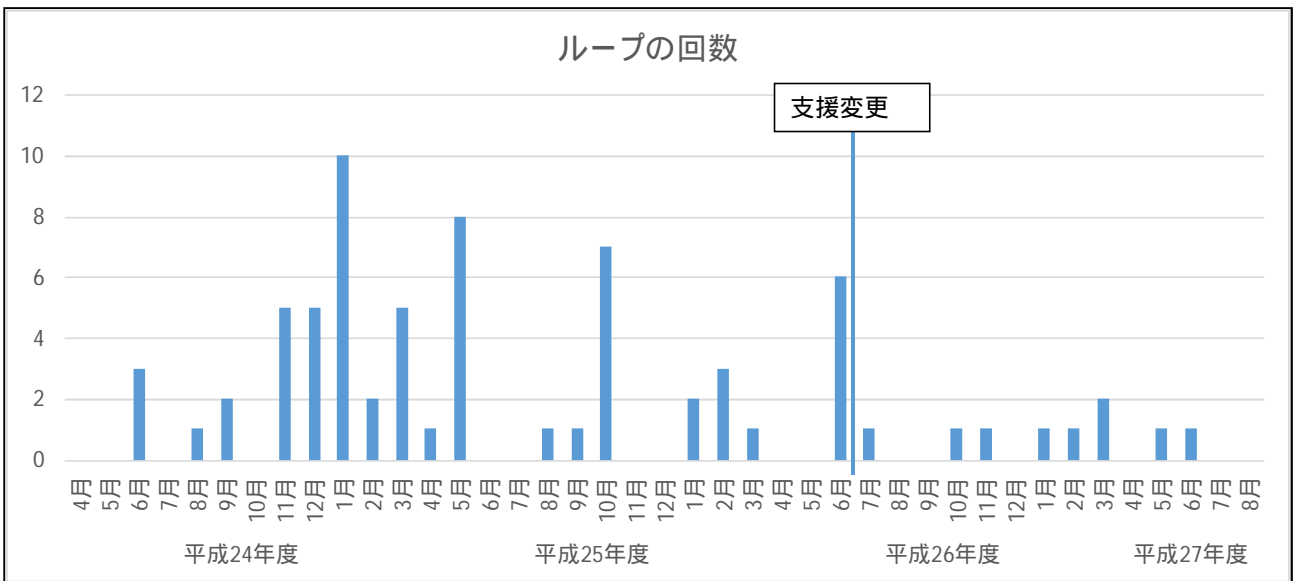


図2 ループの回数

平成 26 年 7 月に上記の対応策を実施し、以降、問題とされた行動は激減していることが確認できる。現在もループしそうになることは時折見られるが、次の課題を促すことで概ね切り替わることができている。

---

掲載日 平成 28 年 3 月 2 日

この文書の所管所属は三浦しらとり園です。